

[論文]

「行く」が表す虚構移動の類型試論

八木健太郎

- 〈目次〉
1. はじめに
 2. 虚構移動表現に関する先行研究
 3. BCCWJに見られる「行く」の虚構移動表現
 4. 対照的経路表現
 5. 対照的尺度表現
 6. 結語

1. はじめに

本稿は、日本語の移動動詞「行く」が「虚構移動 (fictive motion/subjective motion)⁽¹⁾」を表す用例をコーパスから収集し、そこにどのようなタイプが認められるのかを考察する。

「虚構移動」とは、(1)に例示されるような「現実には起こっていない移動を表現する文」⁽²⁾(Talmy2000: 99)とされるもので、(2)のように日本語の移動動詞「行く」が使われた文でも観察される。

- (1) a. The fence goes from the plateau to the valley.
 b. The vacuum cleaner is down around behind the clothes-hamper.
 c. I looked out past the steeple. (Talmy2000)
- (2) a. しばらくすると高圧線の鉄塔に着きました。下方へ行く電線です。
 b. ブルーベリー園にブルーベリー狩りに行ってきました。九州横断道の小郡ICからまっすぐ南に行ったところにあります。
 c. 球児はやはりプロの技に目が行くらしく、… [BCCW]⁽³⁾

(1a)では、高台から谷間まで続くフェンスの地理的な範囲・形状が描写されており、実際に空間を移動する物体は存在しない。(1b)や(1c)も、掃除機の位置が洗濯籠の向こうにあることや、「私」が尖塔の向こうを眺めていることが示されており、実際の空間移動は生じない。(2a)、(2c)も同様であり、電線自体が下方に移動するわけでも、プロ野球選手に向かって具象物が移動するわけでもない。(2b)に関して任意の車両の移動を想定することは可能だが、それはあくまでも実際の道路の紆余曲折を無視して南下する理想化された移動であり、特定具象物の移動が想定されずともこの表現は可能である。

こうした実際に起こっていない移動を移動のように表す表現の特筆性は、

我々が言語を使用する際に必ずしも客観的に外界を描写しているわけではなく、自身の主観的な捉え方に基づいて言語化していることを示す点にあり、Langacker (1983, 1987, 2005) や Talmy (1996, 2000), Matsumoto (1996a, 1996b) をはじめとした認知言語学の枠組みでは、これまで英語や各言語においてどのような虚構移動表現が見られ、どのような種類の捉え方に基づいて言語化が行われているのかという問題に検討が重ねられてきた。また、日本語の虚構移動表現に関しては、松本 (1997, 2004, 2017) や Matsumoto (1996a, 1996b) 等において、そのサブタイプである範囲占有経路表現と到達経路表現、視覚表現を中心に、精緻な分析が加えられている。

しかし、松本 (1997: 218) に「日本語においてどの動詞が視点移動の場合にも使えるかという点に関しては微妙な点が多い」とあるように、「行く」のような個別の動詞がどのような虚構移動表現を表し易く、どのような虚構移動表現は表し難いのかという点が完全に明らかになっているわけではない。また、Talmy (2000) や Langacker (2005) において虚構性 (fictivity) を帯びた言語表現の偏在性が示唆されているように、日本語の虚構移動表現には、松本が取り上げた3種以外にもいくつかのタイプ (サブタイプ) があることが予想される。松本の諸研究は主に、広く言語類型論の観点から日本語の移動表現や視覚移動表現と他言語との異同を明らかにしたものであるが、本稿では微視的な観点から、使用頻度と意味範囲の両面において最も基本的な移動動詞の一つと考えられる「行く」⁽⁴⁾を一例として取り上げ、この一語がどのようなタイプの仮想移動を表し得るのかを確認することにする。

以下、2節では主に英語における虚構移動表現一般に見られる特徴を明らかにした研究と、日本語の3種の虚構移動表現に関して詳細な分析を行った松本の諸研究を概観し、3節では大規模コーパスを用いた用例収集とその分類方法について説明する。その後、収集した用例に見られ、これまで先行研究においてあまり言及されてこなかった虚構移動表現のタイプを2種取り上げ、本研究が「対照的経路表現」と呼ぶタイプを4節で、「対照的尺度表現」と呼ぶタイプを5節で考察する。

松本 (1997)

(5) a. 太郎はその窓から山の方を見た.

〈視覚表現における虚構移動—視覚的放射〉

b. 富士山が目飛び込んできた.

〈視覚表現における虚構移動—映像の移動〉

c. 花子はその子に目を移した.

〈視覚表現における虚構移動—注視点の移動〉

(松本2004)

(3) の2例は、英語で Coverage Path Expression と呼ばれる (1a) のような表現に対応するもので、日本語では「範囲占有経路表現」と呼ばれる。「主語で表されている物体の位置、範囲などが移動動詞を用いて表されている」(松本1997: 207) 表現であり、現実のモノの移動ではなく、起点格から着点格へと話者の注視点が移動するものであるため、虚構移動の1タイプに位置づけられる。(4) の2例は、英語で Access Path Expression と呼ばれる (1b) の表現に当たるもので、日本語では「到達経路表現」と呼ばれる。「主語で表された物体の位置を、そこに到達するための任意の物体の仮想上の移動に基づいて表現する」(松本1997: 220) ものと規定される。さらに(5) の3例は、(1c) のような英語の視覚表現に対応する日本語の視覚表現であり、(5a) は主語から対象物へと視覚的な放射が行われているタイプ、(5b) は主語にある対象物から認知主体に向かって映像が移動したと捉えられるタイプ、(5c) は他所から二格名詞へと視点が移動したと捉えられるタイプとされる。

以上のように、松本 (1997, 2004) が取り扱った虚構移動表現の3種は、英語において観察される表現に対応する日本語の表現であり、小原 (2007) 等でもこれらのタイプに限定した事態類型が進められているが、日本語の移動動詞自体には他にどのようなタイプやサブタイプが見られるのかという疑問は残る。松本 (2017: 247) において「視覚的放射と呼ぶ移動事象表現タイ

プに関しては、松本（2004）以外には取り上げた研究がない」と述べられているように、日本語の虚構移動表現に絞り込んだ、どのようなタイプの表現があり得るのかという考察には、未だ多少の余地が残されているものと考えられる。Langacker（2005）では、*Joe wants to meet an actress.* のような文の *an actress* が現実世界に存在する特定の指示物を持たない場合について、現実の個体ではなく、想像された例であり、「虚構的存在（fictive entity）」であるとしており、言語表現には虚構に基づく概念化が偏在していると考えられ、個々の語の意味的ネットワークにおいてどのような虚構的表現が見られるかを確認することには一定の意義があるものと考えられる。

本稿では、次節以降、松本が提示したこれらのタイプが個別の動詞「行く」に関してどの程度見られるのか、またこれら以外にどのようなタイプが認められるのかという点を確認する。

3. BCCWJに見られる「行く」の虚構移動表現

移動動詞「行く」が虚構移動を表わす用例は、大規模コーパスである「日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」より収集した。まず〈語彙素が「行く」〉の条件のみで検索した結果から無作為に6000件を抽出し、そこから本動詞の「行く」としての用例のみを選んだ。「出ていく」や「変わっていく」等、複合動詞の後項要素となるものや、位相表現の「いかん」、可能形の「いける」等は便宜上除外し、最終的に虚構移動表現の「行く」の例文として771例を収集した。それらを2種に大別した表1と表2を以下に示す。ただし、虚構移動表現の実例には、いずれかの範疇に離散的に振り分けることが難しいものも多く、分類は典型的な例を中心とした大まかなものとせざるを得なかった⁽⁶⁾。したがって、タイプ別の検出数はあくまでも目安として示すものであり、本稿では各タイプのサンプルの多寡に基づいた主張は行わない。

表1は、空間領域内での視線の移動が想定されるタイプであり、77例あっ

表1：空間領域内での視点移動が想定されるタイプ（77例）

| タイプ | 検出数 | 例文 |
|---------|-----|--|
| 範囲占有経路 | 4例 | 登山道は右へいたり、左にいたり、ジグザグにおれまがっている。 甲州道中の道はまっすぐ行くのだが… |
| 到達経路 | 19例 | 中心地からさらに国道三百六十五号線を南へ十余キロいったところに、宿場の里・板取はある。 二台の車、つまり彼自身の車とクレイグヘッドの車は通りを二つほど行ったところに、縦に並んで、前部と尾部をほとんどくっつけんばかりに駐まっていた。 |
| 視覚表現 | 17例 | 私自身も、つい女の人の胸にばかり目がいきました。 目配りが隅々までいっている。 |
| 非具象物の移動 | 8例 | 弱いところにしわ寄せがいくということはよくあることで、… 広島パブリカの重役から河野のところに連絡が行き、… |
| 視界からの移動 | 5例 | ラジオは持っていないだろうな。おれのはどっかにいっちゃったんだ。 五戸町、六戸町、七戸町、八戸市、九戸村、とあるが、四戸はどこに行ったんだろう。 |
| 対照的経路 | 24例 | 廊下の奥へ行くほどその暗さは度を増して… 日本列島では、南方に日長反応性が強い品種が分布し、北方にいくにしたがい日長反応性が弱い品種が分布している。 |

た。松本（1997, 2004）で言及された範囲占有経路表現、到達経路表現、視覚表現（注視点の移動）はすべて実際に観察された。ただし、松本（1997）でも指摘されている通り、「フェンス」のような経路として移動を想定させ難い主語のものは認められず、また起点句と着点句の両方が明示されて経路の範囲を示すような例も確認されなかった。確認された4例はすべて、「登山道は道は右に行ったり、左にいたり…」のような、経路の形状を示すものだった。

また、松本（1997, 2004）で取り上げられた3つのタイプの他に、空間上の虚構移動を表すタイプが3種観察された。1つは、「太郎にしわ寄せが行く」や「太郎に連絡が行く」のような、非具象物が空間上を移動しているかのように表現するタイプである。特定具象物の物理的な空間移動が実際に行われたわけではないので、これも虚構移動の1種と考えられる。2つ目は、

「(おれのラジオは) どっかにいっちゃった」のような、対象物が知覚主体の視界から外部へ移動するように捉えたタイプである。松本(2004)では、(5b)のような対象物の映像が視覚的知覚の主体の方に向かう移動を取り上げ「映像の移動」と呼んでいるが、このタイプは対象物が知覚主体の視界の外に移動するかのように捉えたものであり、「映像の移動」のサブタイプ、ないしは正反対の事象を表すタイプとして位置づけられる可能性がある。3つ目は「廊下の奥へ行くほどその暗さは度を増して」のような、経路の基点と着点との状態の対照性を移動に基づく、経路の起点と着点の間の状態の違いを表すタイプである。本稿では、次の4節において、特にこの3番目のタイプの特徴について検討を加える。

表2は、抽象的な領域における、時間軸や抽象的な尺度上の心的走査が想定されるものである。松本の先駆的研究は、虚構移動の典型例として同一空間上の起点から着点への視点の移動に限定した分析を展開しているが、よく知られるように、移動動詞はその抽象的な意味として時間的な展開を表す。「手術はうまくいった」の「行く」が表す時間的展開は、話者が設定した概念世界の中での手術前の局面から手術後の望ましい結果が出た局面への心的走査であり、特定具象物の空間移動のような現実の移動ではない。本稿のコーパスデータでは、686例が、抽象領域内での心的走査が関わるものと考え

表2：抽象領域内での心的走査が想定されるタイプ (686例)

| タイプ | 検出数 | 例文 |
|----------|------|---|
| 事態の時間的展開 | 316例 | 定期診断で見つかった病根の手術がうまくいかず… |
| | | 問題が発生すると審査が予定どおりに行かず… |
| モノの時間的展開 | 224例 | 今度の秋の展覧会には、この犬、絶対にトップへ行きますよ。 |
| | | 石塚にとっては小枝が飯島と結婚し、水尾流が守旧派でいくことは都合がよかったはずだ。 |
| 思考の展開 | 125例 | 天子のほうではその勢力を無視するというわけにはいかない。 |
| | | 展望台に留まって納得のいくまで写真を写した夏江は、… |
| 対照的尺度 | 21例 | 「五十銭か?」「五十銭までいかねえんだよ」 |
| | | 介護保険の給付の場合は、上限は恐らく五万までいかないでしょう。 |

られ、そのうち「うまく行く」のような事態の時間的展開を表わすものが316例、「そのうちトップへ行く」のようなモノの時間的な時間的展開を表わすものが224例、「納得が行く」ような思考の展開を表わすものが125例、「5万まで行かない」のような尺度上の値に関するものが21例認められた。これらのうち特に最後の尺度上の値に関するタイプについては、5節において検討を加えることにする。

4. 対照的経路表現

「行く」のコーパス上の用例には、「範囲占有経路」や「到達経路表現」と同様に注視点の移動に基づく虚構移動表現の1種と位置づけられるものの、それらとはまた異なる意味を表すタイプが確認された。(6)や(7)がそのタイプの例である。

- (6) a. 廊下の奥に行くほどその暗さは度を増して…
 b. 南北に長い日本列島では、南方に日長反応性が強い品種が分布し、北方に行くにしたがって、日長反応性が弱い品種が分布している。
 c. 椎間板腔はL1-2椎間板で最小で、下方に行くにつれて高さを増す。 [BCCWJ]
- (7) a. 地方に行くとは結構新築も多いです。
 b. 実は国有林のなかにつくられたスキー場へ行くと、管理課長だの次長だのは営林署出身が多い。
 c. 九州や東北地方へ行くと、建部神社とか建部という地名は出てこない。 [BCCWJ]

(6)の各例では「～ほど」のような様態節⁽⁷⁾や「～にしたがって」、「～につれて」などの時間節、(7)では「～と」の条件節内に「行く」が置かれているが、いずれも従属節内に「行く」の具体的な移動主体を主語として立て

ることはできず、現実移動とは考えられない。例えば、(6a)の話者は廊下の入口に立ってそこから奥に一歩も進まずにこのように言うこともでき、(6c)ではそもそも人体の内部を現実移動する物体を想定することが難しい。したがって、これらの文が話者の注視点移動によって成り立つ虚構移動表現であることは明白である。(6a)であれば廊下の手前から奥へ、(6b)では日本列島のある地点から北の端へ、(6c)では第1腰椎から第5腰椎へと、漸次的な注視点移動がなされ、その注視点移動と同時に主文述語が表す状態(暗い状態、日長反応性が弱い品種が多い状態、椎間板腔が高い状態)も漸次的にその程度を増していく。移動の起点において見られた状態は、仮想的な移動ともなまって徐々にその程度を増し、着点まで行くとその状態は起点の状態とは対極をなす状態となるため、経路全体はその両端で対照的な状態を帯びた様態として描かれる。同様に(7)では、任意の一地点から地方や国有林の中のスキー場、九州や東北への注視点移動が想定され、それによってそれぞれの着点句の状態が起点の状態と異なり、新築が多い状態、営業林出身の管理職が多い状態、建部の名称の地名が少ない状態になることが確認される。

範囲占有経路表現は「主語で表されている物体の位置、範囲などが移動動詞を用いて表現されている(もの)」(松本1997:207)と規定されており、到達経路表現は「主語で表された物体の位置を、そこに到達するための任意の物体の仮想上の移動に基づいて表現するもの」(松本1997:220)とされるが、このタイプは「主文の主語が表すものの二地点間の状態の違いを移動動詞を用いて表現するもの」と規定でき、本稿ではこれを「対照的経路表現」と呼ぶ。図1は(6a)、図2は(6b)の概念図である。

この対照的経路表現と範囲占有経路表現や到達経路表現の違いは、移動動詞が時間節等の従属節内に置かれるという形式と、「対象の位置を表す」か「対象の状態の違い」を表すかという意味に見られる。対照的経路表現がその意味的成立要件として対象の起点と着点の状態の違いを表すものであるということは、(8)や(9)のような例の適否から確認される。

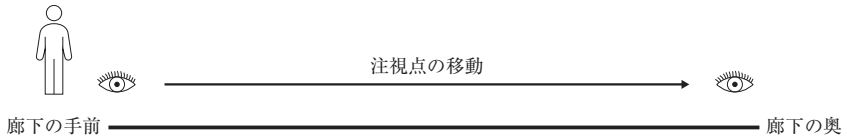


図1：「廊下の奥に行くほどその暗さは度を増して」の概念図



図2：「地方にいくと結構新築も多い」の概念図

- (8) a. 「ハワイに行ったら、ランチでも2000円以上するらしいよ」
b. 「??ソウルに行ったら、日本と物価が同じくらいらしいよ」
c. 「先週ソウルに行ったら、日本と物価が同じくらいだった」

[作例]

- (9) a. 「一番後ろの席まで行くと、学生が弁当なんかを食べている始末だ」
b. # 「一番後ろの席まで行くと、熱心に話を聞いてくれている」

[作例]

(8a) の発話者は、発話場面である日本国内の昼食の相場が2000円よりも安いという認識を前提として持っており、ハワイのランチ価格を日本の価格と対照的に描写している。虚構移動の着点であるハワイの状態が、起点である国内都市の状態と対照的に捉えられるため、この文は対照的経路表現として

も自然に成立する。しかし、(8b)では起点となる国内都市と着点のソウルとの間に状態の相違が示されない。このように起点と着点の2状態に対照性が認められない場合は、対照的経路表現としての適格性が落ち、文として自然に容認され難くなる。当然のことながら、(8c)のような現実移動の場合にそのような制限はなく、起点の状態と異なる着点の状態の対照性を確認しようとする仮想的な注視点移動が、このタイプの虚構移動表現の可否に関与していることが確認できる。(9)は大教室の教卓の位置に立つ教員が最前列の学生から最後列まで注視点を移動させて確認した教室全体の状態の描写である。(9a)では、知覚主体である教員から近い最前列から最後列まで仮想的に注視点が移動し、前の方の席において比較的良好であった学生の受講態度と、最後尾のかなり悪い受講態度が対照的に描かれているため、適格文と認められる。(9b)に関しては、もし2つの状態が対照的でなく、最前列から最後列まで同様の受講態度であるような場合は対照的経路表現として不適格になり、前列のほうが悪く後列に行くほど良いという稀有な状況を表わす場合は、適格文となる。このように、対照的経路表現は、注視点の移動を通して経路の起点の状態とは対照的な着点の状態を確認するための表現と考えることができる。

次に、この対照的経路表現の成立にも仮想的な注視点の移動が必須であることを確認する。このことは(10)に見られる文の適否からわかる。

- (10) a. {海/湖} の底に行くと、珍しい魚が泳いでいる。 [作例]
 b. ?? {水槽/金魚鉢} の底に行くと、珍しい魚が泳いでいる。
 [作例]

(10a)の場合、一般的に水面から海底や湖底までを一目に見通すことはできず、たとえ仮想的な移動であっても、水面から少しずつ深部へと注視点を移動することになる。このように注視点を移動させていくプロセスが想定できる場合、虚構移動表現は適格文となる。これに対して、(10b)の水槽や金魚鉢の底は一目で瞬時に確認でき、注視点が少しずつ深部へと移動するプロセ

スは想像できない。その場合、虚構移動表現は成立しない。以上のことから、松本（1997）や Matrock（2004, 2010）が範囲占有経路表現や到達経路表現に関して言及している通り、この対照的経路表現においても、仮想的な注視点の移動が関与しており、注視点の移動がなければ虚構移動表現は成立しないことがわかる。

ここまでこの対照的経路表現の成立には仮想的な注視点の移動が関わることを確認してきたが、この節の最後に、仮想的な注視点の移動には、それを行う必然性やインセンティブが必要であることを見る。このことは、以下の(11)の表現の適否が、描写する状況や発話者の違いによって異なる事実から確認できる。

(11) #商店街を最後まで行くと、自動販売機が3台設置されている。

[作例]

まず、(11)の文が図3の状況Aのように、3台の自動販売機がすべて着点に設定された状況を表す場合、この対照的経路表現は、着点である商店街の一番奥とそれまでの経路の対照性を示し問題なく認められる。しかし、同じ表現が図4のような、各自動販売機が点在する状況を表す場合には、着点とそれまでの経路との対照性が感じられず、対照的経路表現としての容認度は著しく下がる。

ただし、(11)の文が状況Bを表す場合であっても、この文の発話者に注視点の移動を行う必然性やインセンティブがあれば、この発話の適格性は再

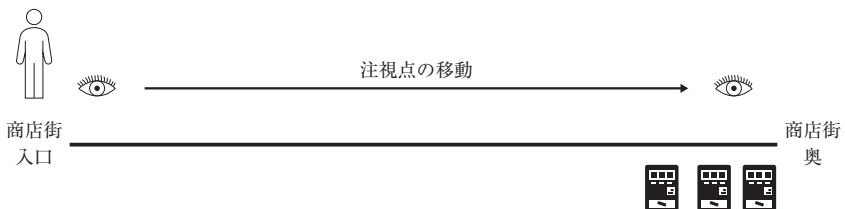


図3：例文(11)が表す状況A



図 4：例文 (11) が表す状況 B

度上昇する。例えば、この文の発話者が、短い区間に 3 台の自動販売機が設置されている事例があるかどうかを調べる調査を行っているような場合、注視点の移動を行う話者は、自動販売機が設置されていないか確認しながら経路を辿り、3 台目を確認した際にそのタスクを完遂した状態になる。この場合、着点とそこまでの経路自体の対照性が示されるわけではなく、区間内に自動販売機が 3 台あるかどうかを調べるタスクが着点において達成されたことによる、タスク未達とタスク完遂の対比が示されていると考えられる。以上のことは、何らかのタスクを持った仮想的注視点の移動は、着点においてタスクが達成される場合には対照的な経路を示すものとして、容認されやすくなるということを意味する。実際、(11) の主文述語を否定文にした (12) は対照的経路表現として成立しない。

(12) ?? 商店街を最後まで行くと、自動販売機が 3 台設置されていない。

[作例]

(12) の文は、起点状態と着点状態あるいは経路全体のいかなる対照性を示すことができないため、対照的経路表現として適格文にならないと説明される。

5. 対照的尺度表現

コーパスの収集例からは、(13) のような、抽象的な領域に想定される一

(8)
 次元尺度を経路とする値から別の値への心的走査に基づく虚構移動と考えられる例も数多く観察された。

- (13) a. 「このメンバーなら良い結果が出ると思っていたけど、最優秀賞までいくとは思わなかった。」と笑顔で話しました。
 b. 「タクトよりクレージュタクトの方がステイタス高いんですか？」
 「クレージュタクトまでいくとマニアになってしまいます」
 c. 「二けたの数って分かるかな」「分かるよ。百までいかない十の位と一の位のある数」 [BCCWJ]

(13a) は音楽コンクールで最優秀賞を受賞した学生の発話であるが、当該チームは、例えば「優秀賞」等の序列から最優秀賞の序列へと繰り上がったわけではなく、予想された序列からより高次の序列へと、話者の心的走査が行われている。また、(13b) は、2種類のバイクのどちらを購入するべきかという問題について話し合っている2人の話者の会話であるが、第2話者の発話にある「行く」の移動は、マデによってマークされた「クレージュタクト」に向けた現実移動や仮想的な空間移動ではなく、「マニアックさ」のような尺度に基づき、「タクト」が位置づけられた値から、「クレージュタクト」が位置づけられるより程度の甚だしい値への心的走査である。(13c) は数の概念について質問する大人と、それに答える子どもの会話であるが、ここでも、後の発話にある「行く」は現実移動や仮想的な空間移動ではなく、数の尺度に基づいた、1桁から2桁（3桁の手前）への心的走査と考えられる。(13a) の概念図を図5に示す。

なお、これらの表現における心的走査は、同一の尺度上でデフォルト値

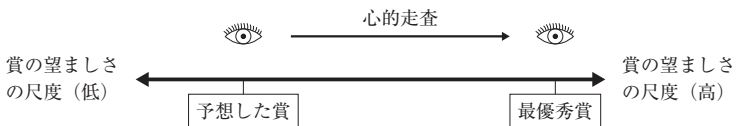


図5：「最優秀賞までいくとはおもわなかった」の概念図

や文脈上定められた基準値からの移動である。(13)の例であれば予想された賞のレベルや、比較対象としての「タクト」、「0や一桁の数」が起点となっている。(14)のように話者の世界観に基づて起点が設定される場合も、(15)のように文脈において比較基準が示される場合もある。

- (14) a. 友人の数が3桁まで行くと、逆に信用できない。
 b. 貯金額が3桁まで行くと、さすがに結婚相手としては考えられない。 [作例]
- (15) a. 9,800円ぐらいなら買うが、12,000円まで行くと手が出ない。
 b. 12,000円ぐらいならお譲りするが、9,800円まで行くと話にならない。 [作例]

(14a)の話者は、友人の数は1桁か2桁ぐらいが一般的だと考えており、そのデフォルト値から予想外に多い3桁という値へと心的走査を行っている。(14b)の話者は逆に、結婚相手の貯金額は多い方が望ましい、あるいは普通であると考えており、そこから予想外に少ない3桁の金額とという値へ、心的走査を行っている。(15a)は購入者、(15b)は販売者の立場からの発話であるが、基準点となる値が前文脈で示されれば、そこから想定外により高い値、低い値へと心的走査を行うことが可能になる。

なお、この表現の心的走査においてデフォルト値が起点として機能することは、(16)から確認できる。

- (16) a. 大盛までいくと食べきれない。 [作例]
 b. 小ライスまでいくと物足りない。 [作例]
 c. #普通盛りまでいくと {丁度いい/食べきれない/物足りない}。
 [作例]

(16a)と(16b)は、食堂におけるご飯の量の尺度に基づき、デフォルト値である「普通盛り」から、より多量もしくは少量へと心的走査を行うことにより成立する虚構移動表現である。しかし、デフォルト値と考えられ

る「普通盛り」が着点に据えられた場合、どこからどこへの心的走査が行われるのか不明になる。そのため、一般的な文脈では(16c)は適切な虚構移動表現とは認められない。ただし、例えば話者がかなりの小食であることが文脈等で共有されている場合、心的走査の起点は「小ライス」等に据えられているため、「普通盛り」までの心的走査が可能になり、「普通盛りまでいくと食べきれない」のような発話は虚構移動表現として成立する。

次に、このタイプの表現の成立に心的走査が関わっていることも以下のように確認できる。ここで言う心的走査は、概念領域内のある注視点から別の注視点への意識のシフトであり、この対照的尺度表現の場合、一次元的な尺度上のある値（デフォルト値や文脈上定められた基準値）から別の値に話者が注意を移すことを意味する。したがって、値に関して話者の認識の変更が認められないケースは、心的走査が行われず、虚構移動表現として成立しないことが予想される。(17)や(18)と(19)のBの発話の適否の違いは、この点から説明される。

(17) A：その国の人口は今現在、どのくらいですか。

B：だいたい400万人くらい {です/??まで行きます} よ。 [作例]

(18) A：その国の人口は今現在、400万人くらいですか。

B：はい。ちょうど400万人くらい {です/??まで行きます} よ。

[作例]

(19) A：その国の人口は今現在、400万人くらいですか。

B：400万どころか、4000万人くらい {です/まで行きます} よ。

[作例]

(17)のAの話者がその国の人口について全く知識を持っておらず、Bの話者もそのように考えて単純に事実を伝達するような場合、基準点が定まらず、どのような値から400万人という値までの心的走査を想定すればよいのかが不明であるため、「400万人まで行きます」という虚構移動表現は成立しない。また(18)では、Aの話者が400万人という基準を設定しているため、

Bの話者は基準点からの心的走査を示す必要がない。基準点から別の値への心的走査が行われないため、単純な状態を叙實的に表す「400万です」だけが許され、虚構移動の「400万人まで行く」は許されない。これに対して、(19)では、Aの話者が設定した基準値が低く、実際の値はそこからより高い4000万人であるため、人口の尺度上で心的走査が行われ、「4000万人まで行く」が可能となる。

また、このタイプの表現が、一元的で連続的な尺度を経路とするものであることは、以下のように確認される。まず、この表現において経路として認められるものは、 $<高 - 低>$ や $<望ましい - 望ましくない>$ 等、(20)のような段階性を持って両極ないしは一方の極へ連続的にその程度を増していく尺度を成すものに限られ、(21)のような連続性や段階性の感じられない二律背反の2つの概念は経路として機能しない点を確認される。

- (20) a. 100万円まで行くと、買えない。 《多寡の連続的尺度》
 b. 理想的体形まで行くと、逆に怖い。 《望ましさの連続的尺度》
 c. BLまで行くと、ついていけない。 《過激さの連続的尺度》

[作例]

- (21) a. ??女 {まで/に} 行くと、恋愛対象になる。 《男/女》
 b. ??理系 {まで/に} 行くと、苦手だ。 《文型/理系》
 c. ??死 {まで/に} 行くと、想像もできない。 《生/死》

[作例]

(20)では、《金額の多寡》、《望ましさ》、《過激さ》などの連続的な尺度が経路として機能し、それぞれの尺度上を、基準値からより高い値へと心的走査がなされるため、虚構移動表現として成立する。一方、(21)で着点句に置かれた名詞は、一般に《男と女》、《文型と理系》、《生と死》のような、二律背反で非連続的な概念の並置関係を示すもので、そのような場合2つの概念は経路として機能せず、「女になると」や「理系になると」、「死(の話)になると」で表すような意味を自然に表すことはできない。例えば(21b)に

において、文系と理系の間に位置するような学問分野が想定され、理系が位置付けられる極に《客観性の尺度》のような方向性が感じられた場合は、この文の虚構移動表現としての自然さは上昇するものと考えられる。

このタイプの表現が、一元的で連続的な尺度を経路とするものであることを示すもう一つの言語事象は、二格で着点を表わす場合に認められる。このタイプの文型は、コーパス調査でもマデによって着点が示される例が多く、森田(1979)でも、典型的にはマデとともに使われることが示唆されている。以下の(22)は、マデと共起した場合としてコーパスで認められたものであるが、いずれもマデを二に言い換えると適格度が落ちる⁽⁹⁾。

- (22) a. 気候もここは、温暖 {とまでは/?? には} いかないけど、とてもいい所よ。
 b. 自分が嫌い {までは/?? には} いきませんが、改善するように努力しています。
 c. トヨタ {とまでは/?? には} いかないにしろ関連会社の求人はあるのでは??
 d. 児童虐待 {までは/?? には} いかなくとも、最近は目に余る親の態度がある。 [BCCWJ]

しかしこのことは、文型的な制約等で二格が現れないためではない。(23)のように、尺度上の値としての性質が明示された場合は、二格によってその値を示すことが認められ易くなる。

- (23) a. ここの気候はある程度過ごしやすいけれど、はっきり温暖と切り切れるレベルにはいかない。
 b. 自分にあまり自信を持てずにいるが、明確に自分が嫌いレベルにはいかない。
 c. トヨタほどの国内最高水準にはいかないにしろ、関連会社の就職があるのでは??

- d. 通報すべき児童虐待の程度にはいかなくても、目に余る親の態度がある。 [作例]

(23a) や (23b) の「レベル」、(23c) のように「水準」、(23d) の「程度」のような尺度上のある段階や値を表すものであることを明示し、着点句の値と対照化できる基準値を言語化することで、このタイプの虚構移動表現の着点は二格でも表すことが可能になる。

以上のように、(11) のような尺度上の2値対照表現は、抽象的な概念の領域の一元的尺度を経路として、基準となる値からより程度の甚だしい値への心的走査を表わすものと考えることができる。

6. 結語

本稿では、日本語書き言葉均衡コーパスから収集した771例文に基づき、本動詞「行く」が表す虚構移動のタイプにどのようなものが見られるのかを検討した。

松本 (1997) と松本 (2004) において示された3つのタイプのうち「範囲占有経路表現」に関しては、その典型例と認められるようなものは見られず、主語で表される経路の形状を表すもののみ少数確認された。「到達経路表現」と視覚表現に関しては、すべて一定数の実例が確認された。

また、松本が挙げた3種以外の虚構移動表現のタイプとして、特に2種を取り上げ、その特徴を検討した。「対照的経路表現」は、「～へ行くほど」や「～に行くにしたがって」、「～まで行くと」のように従属節内に「行く」が現れる形式を持ち、主文の主語が表すものの二地点間の状態の違いを移動動詞を用いて表現するタイプであることを示した。また、「範囲占有経路表現」等についての先行研究の指摘と同様に、このタイプにも注視点の移動が関わっていること、注視点の移動にはインセンティブの有無が関わることを示した。もう一種の「対照的尺度表現」は、抽象領域に設定される一次元的尺度

に基づき、デフォルト値や文脈上設定された基準値から別の値への心的走査によって成立する表現であり、程度差を持った連続的な尺度だけが経路として機能することや、デフォルト値や文脈上設定された値が起点として機能していることを明らかにした。

松本（2017）や Matsumoto, et al.（2022）等では、移動事象全般を類型論的観点から整理する研究が進められているが、なぜ日本語の範囲占有経路表現において「行く」は用いられにくいのか、なぜ虚構移動を表わす移動動詞が従属節におかれることが多いのか等、各論において必ずしも明確になっていないこともあり、各個別言語の個別の動詞の振る舞いを観察し、従来の知見と照らし合わせることは今後も必要になるものと思われる。

【注】

- (1) 英語では、Langacker (1987), Matsumoto (1996) 等において “subjective motion”, Talmy (1996, 2000a) や Matsumoto (2001) 等において “fictive motion”, Langacker (1986) や Matrock (2004, 2010) 等では “abstract motion” が使われ、日本語においても松本 (1997) では「主観的移動表現」、松本 (2004) では「虚構移動」、本稿では松本 (2004) に倣い「虚構移動（表現）」を使用する。
- (2) “sentences that that depict motion without no physical occurrence” (Talmy2000 : 99)
- (3) 本稿が示す例文の末尾に [BCCWJ] と記載されたものは、全て、国立国語研究所の大規模コーパス（「現代日本語書き言葉均衡コーパス」）から得られた実例である。
- (4) Talmy (2000 : 169) では、“The cognitive phenomenon of fictivity is more general than just fictive motion, in fact covering fictive X, where X can range over many conceptual categories.” とあり、虚構性が言語の様々な範疇に関わることが示唆されている。
- (5) BCCWJ における「行く」の検出件数は検索対象語数104,911,460中の220,816であり、出現頻度は0.0021であった。「通る」では0.00006、「走る」では0.00014、「出る」では0.00077であり、基本動詞の中でも「行く」の出現頻度の高さは顕著である。また、語の多義構造を整理して記述している国立国語研

究所の「基本動詞ハンドブック」では、本動詞「行く」の意味は、21の別義に分類されており、一般的な意味を表す基本動詞であるがゆえに複雑なネットワークの構成が進んだものと考えられる。第1言語習得に関しても、高梨(2009)の調査では、終止形の「行く」の初出の平均は1歳7.15カ月と早期である。これらのことから「行く」が移動動詞の中でも最も基本的な語の一つであることは異論を待たない。

- (6) 例えば、BCCWJから採取した「日中泳いで日焼けのつもりがやけどまでいき、痛い思います」のような例の場合、「やけどまで行く」は時間的な進行を表すと捉えるか、「<日焼け>から<やけど>に続く一次元的尺度の甚だしい値を示すものと捉えるかは判別がつき難い。こうしたことから本稿では、典型的な例を分類し、各タイプの検出数に関してはあくまでも目安として提示する。
- (7) 「様態節」や「時間節」、「条件節」等の従属節の名称に関しては、日本語記述文法研究会(2008)に従う。
- (8) 本稿では空間領域における観察者の注視点の移動と、抽象領域における心的走査を、便宜上分けて議論を進めているが、「日本列島を北に行く」とのようなスケールの大きな空間移動を純粋な空間移動とし、抽象領域での心的走査が関与しないと考えることは難しい。「心的走査」に関しては今後より精緻な規定が必要になる。
- (9) 菅井(2001)は「会議が夜9時(まで/??に)続いた」のような文を例に、二格が継続的な事象を位置づけることができないとしている。一部の虚構移動表現において二格が現れにくいことには、この点が関与するものと考えられるが、その確認は稿を改めて行うことにする。

〔参考文献〕

- 小原京子(2008)「日本語主観移動表現のコーパス分析：英語との比較から」『慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション(Language, culture and communication)』40, pp.107-122.
- 国立国語研究所「基本動詞ハンドブック」(<https://verbhandbook.ninjal.ac.jp>).
- 菅井三実(2001)「現代日本語の「二格」に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要 第2分冊言語系教育, 社会系教育, 芸術系教育』21, pp.13-23.
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版.
- 高梨美穂(2009)「直示動詞「行く」「来る」の意味獲得 -usage-basedの観点から-」『認知言語学会論文集』9, pp.33-50.

- 日本語記述文法研究会（編）（2007）『現代日本語文法 6』くろしお出版.
- 松本曜（1997）「空間移動の言語表現とその拡張」中右実（編）『日英語比較選書 6 空間と移動の表現』研究社出版, pp.125-230.
- 松本曜（2004）「日本語の視覚表現における虚構移動」『日本語文法』4.1, pp.111-128.
- 松本曜（2017）『移動表現の類型論』くろしお出版.
- 森田良行（1977）『基礎日本語 1』角川書店.
- 森田良行（2004）「移動動詞と空間表現」『国文学解釈と鑑賞』69. 7, pp.19-25.
- Gruber, Jeffery S. (1967) "Look and See," *Language*, 43, pp.937-947.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, Cambridge : MIT Press.
- Langacker, Ronald W. (1986) "Abstract Motion," *BLS* 12, pp.455-471.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar. vol.1 Theoretical Perspective*, Stanford Univ. Press.
- Langacker, Ronald W. (2005) "Dynamicity, Fictivity, and Scanning : The Imaginative Basics of Logic and Linguistic Meaning." ed. by Peacher, D. and R. A. Zwaan, *Grounding Cognition : The Role of Perception and Action in Memory, Language and Thinking*, Cambridge Univ. Press, pp.164-195.
- Matrock, Teenie (2004) "The Conceptual Motivation of Fictive Motion," ed. by G. Radden & R. Dirven, *Motivation in Grammar*, Amsterdam : John Benjamins, pp.221-248.
- Matrock, Teenie (2010) "Abstract motion is no longer abstract," *Language and Cognition* 22(10) (2), pp.243-260.
- Matsumoto, Yo (1996a) "Subjective Motion and the English and Japanese verbs," *Cognitive Linguistics* 7, pp.183-226.
- Matsumoto, Yo (1996b) "How abstract is subjective motion? A comparison of coverage path expression and access path expressions," *Conceptual structure, discourse and language*, ed. by Goldberg, Adele E., *Conceptual Structure, Discourse and Language*, California : CSLI Publications, pp.359-373.
- Matsumoto, Yo (2003) "Typologies of lexicalization patterns and event integration : Clarifications and reformulations," ed. by Chiba, Shuuji et al., *Empirical and Theoretical investigation into language : A festschrifts for Masaru Kajita*, Tokyo : Kaitakusha, pp.403-418.
- Matsumoto, Yo. (2020) *Broader perspectives on motion event descriptions*, Amsterdam & Philadelphia : John Benjamins.

- Matsumoto, Yo, Akita, Kimi, Bordilovskaya, Anna, Eguchi, Kiyoko, Koga, Hiroaki, Mano, Miho, Matsuse, Ikuko, Morita, Takahiro, Nagoya, Naonori, Takahashi, Kiyoko, Takahashi, Ryosuke, Yoshinari, Yuko (2022) “Linguistic representations of visual motion : A crosslinguistic experimental study,” ed. by Sarda, Laure, Fagard Benjamin, *Neglected Aspects of Motion-Event Description : Deixis, asymmetries, constructions, descriptions*, Amsterdam & Philadelphia : John Benjamins, pp.43-68.
- Talmy, Leonard. (1996) “Fictive motion in Language and “ception,” ed. by Bloom, Paul, et al. *Language and Space*, Cambridge, MA : MIT Press.
- Talmy, Leonard. (2000) *Toward a cognitive semantics vol.1 : Concept structuring systems*. Cambridge, MA : MIT Press.

[コーパス]

- 「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」中納言 2. 7. 2 データバージョン2021. 03, 国立国語研究所, (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/>).

What kind of Fictive Motion Expressions can Japanese verb *iku* express?

Kentaro YAGI

The aim of this paper is to investigate what kind of Fictive Motion Expressions (FMEs) Japanese motion verb *iku* (go) describe. In Matsumoto (1996, 2004), Japanese FMEs have Coverage Path Expressions and Access Path Expressions (cf. Talmy2000) as English and other Languages do. Using a corpus (BCCWJ), this paper provides two other types of FMEs in *iku* sentences, which is Contrastive Path Expressions and Contrastive Scale Expressions. The former Expressions describe the contrasting situation between the source and the goal of the path, based on the movement of the point of visual attention. And the latter expressions describe the contrasting values on a one-dimensional scale, based on the mental scanning along the scale.